Phonetic Society of Japan

音声研究　第15巻第1号
2011(平成23)年4月
6-15頁

Journal of the Phonetic Society
of Japan, Vol. 15 No. 1
April 2011, pp. 6–15

研究論文

福井県三国町安島方言における maffa《枕》等の重子音について

新　田　哲　夫*

On the Geminate Consonants of the Antoh Dialect in Fukui Prefecture

Tetsuo NITTA*

SUMMARY: A special geminate like *ff* in *maffa* "pillow", which does not exist in the Standard Japanese (SJ), is found in the Antoh dialect in Fukui Prefecture. This paper deals with the synchronic and diachronic phenomena concerning the *ff* geminate in addition to *bb* and *ss*. This paper has the following purposes:
(1) to illustrate the correspondence of geminates between the Antoh dialect and SJ,
(2) to investigate the historical development of the geminates in the Antoh dialect,
(3) to point out that the manifestation of the geminates in the Antoh dialect is similar to that of the Miyako-jima dialect in the Ryukyuan language, and
(4) to propose that the explanation for the process of the geminate in this dialect gives a suggestive source to the discussion on the processes of sound changes in the Ryukyuan language.

キーワード：安島方言，重子音，唇歯摩擦音，maffa，琉球語宮古島方言，音変化

1. はじめに

福井県坂井市三国町安島（みくにちょうあんとう）は福井県の北西の海岸部，雄島の対岸に位置する。近くには名勝東尋坊がある。この方言は近隣の地域（例えば三国町市街地）からは特異な方言と見なされている[1]。しかしながら，この方言がどのような特徴をもつのか，これまで一部を除いて，目立った記述報告はなかったようだ[2]。筆者の調査によれば[3]，この方言の顕著な特徴として，maffa《枕》，ffoi《黒い》，ssoi《白い》，abba《油》のような一連の重子音が現れる音韻現象があることがわかった。これらの重子音の出現は，琉球語では見られるものの，日本本土方言では珍しいものである。本稿では，これらの重子音の出現を標準語との対応関係から整理し（2節），類似の現象が見られる他の本土方言と比較し（3節），その重子音が成立した過程を推定する（4節）。最後に安島方言の事例が音変化を考える上で，どのような意味をもつのか，琉球語の例を取り上げて検討する（5節）。

2. 対応関係

本稿の最後に対応の資料をあげた。資料を対応の種類ごとにまとめると，［1］の（あ）～（け）のようになる。‖は対応を示す。この記号の左側は標準語や歴史的に対応する形（音韻表記），右側は安島方言の形（簡略音声表記）である。《 》で意味を表す。

［1］標準語等と安島方言の対応例

（あ）kur {a, o, e} ‖ ff {a, o, e} ffa《蔵》, maffa《枕》, ffoi《黒い》, ɸuffo《袋》, kafferu《隠れる》

（い）ku {wa, 'o ,'e} ‖ ff {a, o ,e} ffa《桑・鍬》, iffa《行くワ》, ffo《食お（勧誘）》, ffe《食え》

（う）kwa ‖ ffa　ffaʑi《火事（古形）》

* 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授（Professor, Faculty of Letters, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University）

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

（え）hur {o, e} ‖ ff {o, e}（hura の例は欠）ffo《戸棚（＜風炉）》，afferu《溢れる》

（お）hu {'e} ‖ ff {e}（huwa, hu'o の例は欠）fferu《増える》

（か）bur {a, e} ‖ bb {a, e}（buro の例は欠）abba《油》，bebba《熊手（＜ベブラ）》，kabberu《かぶれる》

（き）sir {a, o} ‖ ss {a, o}（sire の例は欠）ssaN《虱・知らない》，hassa《柱》，ssoi《白い》

（く）zir {o} ‖ ddz {o}（zira, zire の例は欠）iroddzo《色白》

（け）ruwa ‖ vva　ovva《居るワ》，kuvva《来るワ》

安島方言の（あ）～（お）に現れる ff は，無声唇歯摩擦音の長子音で，本稿ではこれらを「重子音（geminates）」と呼び，文字を重ねて表記する。（か）bb は有声両唇破裂音の長子音，（き）ss は無声歯茎摩擦音の長子音で，それぞれ標準語の「促音」の実現と同じである。これらも「重子音」と呼ぶ。ff, ss の重子音は語頭にも現れることが標準語の「促音」と異なる特徴である。

これらのうち（く）ddz は，（き）で現れる「白」の連濁形の形でしか見いだせない。また，（け）vv は有声唇歯摩擦音の長子音で実現するが，今のところ動詞末尾ル＋終助詞ワの音連続に対応する場合しか見いだせない。後に示すように，（あ）～（お），（か）（き）の対応例がお互いに共通する音韻特徴を有しているのに対して，（く）（け）は音韻条件の関連性が薄く，現れる例も孤立的である。これらは他と比べて周辺的なものと見なし，本稿では（あ）～（き）の対応例に焦点をあてる。

（あ）～（き）に関しては，対応する標準語の環境に共通の音韻特徴がある。すなわち，対応する標準語の語形に，/ku, hu, bu, si/ が含まれるという条件のほかに，それに続く音節の子音は /r, w/ か子音ゼロ /'/，かつその母音は /a, e, o/ の広母音に限られる。この条件に合わない場合，重子音が現れない（ex. kuri《栗》，kuru《来る》，ɸuri《ふり（動作）》，ɸuru《降る》，buri《鰤》，naburu《触る》，çiru《汁》，çiri《尻》など）。

これらのことから，（あ）～（き）に関しては，[2] のようにまとめられよう。[2] では，環境を埋める語例を欠いているところは偶然に対応の「空き間」が生じていると見なす。

[2] 標準語と安島方言の対応関係

（あ）～（お）

$C_1V_1C_2V_2$, $C_1C_2V_2$ ‖ ff V_2

C_1 = /k, h/　V_1 = /u/　C_2 = /r, w, '/

V_2 = /a, e, o/

ただし $C_1C_2V_2$ = /kwa/ のみ

（か）$C_1V_1C_2V_2$ ‖ bb V_2

C_1 = /b/　V_1 = /u/　C_2 = /r/　V_2 = /a, e, o/

（き）$C_1V_1C_2V_2$ ‖ ss V_2

C_1 = /s/　V_1 = /i/　C_2 = /r/　V_2 = /a, e, o/

安島方言で見られる重子音 ff, ss, bb は，C_1 が /k/，/h/（実際には [ɸ]），/s/ の摩擦音か唇音の閉鎖音 /b/，V_1 が /u/，あるいは /i/（前の子音が /s/ のとき）の狭母音，C_2 が /r, w, '/ の流音・接近音の共鳴音（sonorants）か実質の子音がない場合，V_2 が /a, e, o/ の広母音という限定された環境で見られるものである。

3. 他方言との比較

安島方言の音韻現象と類似した現象が見られる他の本土方言と比較し，それぞれの異同を述べる。類似した現象は，日本海側の山形・新潟県境地域と石川県能登地方の方言に見られる。類似の現象は琉球語宮古八重山方言でも見られるが，これについては 5 節で扱う。

3.1 山形県温海町方言

山形県の日本海側南端部とそこに隣接する新潟県山北町の一部に，標準語 /ku/ に対応して ɸü (ɸɯ) が現れる現象がある（飯豊毅一 1988，後藤利雄 1972，井上史雄 2000）。[3] の語例は，山形県温海町の例である。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

[3] 温海町方言（飯豊毅一 1988, p. 85）

ɸüɾa《蔵》, ɸüɾɛ:《暗い》, ɸüɾï《栗》, ɸüma《熊》, ɸüsï《櫛》, ɸa《桑》, ɸasï《菓子》, ɸü:《食う》, ɸo:《食おう》, ɸeɾüi《くれる》, ɸeda《くれた》

飯豊（1988）では高齢層が「フ」以外のハ行音でも ɸ を残していることから，ハ行音子音に音素 /F/ を立て，これらの変化を /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と表している。ただ語例からみると /ku'o/・/ku'e/ > /Fo/・/Fe/ の場合もありそうである。

安島方言 ffa, ffo, ffe は，主に標準語 kura, kure, kuro 等の 2 モーラ分のセグメントに対応し，語頭以外も現れる。ここで見られる，ku（標準語の語頭音）対 ɸü（温海町方言の語頭音）という単純な対応関係とは性質が異なっている。

ただし，ɸa《桑》，ɸo:《食おう》では，安島方言で ffa, ffo が現れる。温海町方言でも安島方言でも，w の唇音の要素が関与して，ɸ, ff の唇の摩擦音が発生したという共通点が見られる。

3.2 石川県能登方言

石川県能登地方の珠洲市の一部と能登島の一部でも温海町と同様の現象が見られる（川本栄一郎 1970）。能登島では，標準語「ク」→能登島方言「フ」以外に，一部の語で逆の標準語「フ」→能登島方言「ク」も見られるという。次の例は珠洲市宇都山方言の例である[4]。

[4] 珠洲市宇都山方言（川本栄一郎 1970, p. 107）

ɸɯŋi《釘》, ɸu̥ikɯ《九九》, ɸu̥ɯsï《櫛》, ɸu̥ɯtsï《靴，口》, ɸɯmɯ《汲む》, ɸɯbi《首》, ᵏɸɯsoɾ《薬》, ᵏɸɯɾae̥《暗い》

「薬」，「暗い」の ᵏɸ で表される子音は，「唇に摩擦が生じるが，完全に ɸ にはなり切っておらず k の音もまじって聞こえる」という（川本 1970, p. 107）。

山形県温海町方言同様，珠洲市宇都山方言においても，語頭のみで標準語 ku が方言 ɸɯ に対応している。福井県安島方言で見られる対応関係は，先に述べたとおり，非語頭でも起きており，ku の当該モーラだけでなく，次のモーラの音韻特徴が条件となっており，その様相は珠洲市宇都山方言とは異なる。

温海町・能登両方言で見られる共通の言語現象が，日本海の交通と言語伝播に関係するという示唆が飯豊（1988, p. 83）でなされている。三国町安島も日本海側に位置するが，安島方言の特異性からすれば，伝播の面で他の地域と関係づけるのは，現段階では慎重であるべきと考える。

4. 安島方言の変化

4.1 変化の順序と条件

安島方言の重子音の成立を考える際に，次の（1）～（3）を変化の説明に加える必要がある。

（1）k の変質（摩擦音化・唇音化）と r の消失，およびそれらの順序。
（2）音声的に長い子音（重子音）になった理由。
（3）母音の広狭が関係する理由。

k の摩擦音化，例えば ku > ɸu の変化（温海町，能登方言）や ku > fu の変化（宮古八重山方言, 5.2）は例証されている変化であるが，安島方言では，このような摩擦音化が最初に起きたとすることはできない。なぜなら，r, w などの子音に後続する母音が広い（a, e, o）ときだけ，摩擦音化が起きるという音声学的な説明がつかないからである。また，上記母音の条件のとき，単に r が脱落したとすることも困難である。kura, kure, kuro のときだけ r が脱落する音声学的な理由もないからである[5]。この条件変化の理由を説明するには，次の過程を設定するのが，音声学的に最も適切で変化の説明がスムーズかと思われる。

4.2 推定される変化の過程

4.2.1 kura の変化

安島方言の重子音が発生したプロセスを次のように推定する。[1] の対応（あ）kura の場合，[5]

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

のようになる。kure, kuro の場合も同様に考えられる。(a)～(e) は推定される状態，①～④は推定される変化である。

[5] 安島方言 kura の変化

(a) (b) (c) (d) (e)
kura > kuwa > kk^{w}a > k$\widehat{\text{kx}}^{w}$a > ffa
① ② ③ ④

① r が両唇軟口蓋接近音 w に変化する。変化の前，r は弾き音ではなく接近音 ɹ であったかもしれない。r > w の変化を想定することで，この変化が ra, re, ro の広母音が続く環境でしか起こらなかったことが説明できる。すなわち，(b) の段階で wa, we, wo が共時的に存在し得る音連続であったために変化が起き[6]，wi, wu は存在し得ない音連続であったために変化がブロックされたのであろう。

② (b) の段階で，uwa > wa の縮約・短音化 (coalescence, reduction) が起こる。縮約が起きた分，子音が代償延長 (compensatory lengthening)[7] し，音声的に長い子音が発生する。子音 k は w によって唇音化する。この変化は，比較的起こりうる変化であろう。例えば一般に takuwaɴ > takk^{w}aɴ《沢庵》，tɕikuwa > tɕikk^{w}a《竹輪》の変化などがあげられる[8]。

③破裂音 kk^{w} が破擦音化し，k$\widehat{\text{kx}}^{w}$ が生じる。これは破裂音が長い子音であることにより，閉鎖時の声道内の気圧が高まり外破のときに強い呼気が生じやすいことに関係するかもしれない。なお，破擦音化においても，唇音化は保存される。4.3 で述べるように中空清三郎 (1964ab, 1991) では，状態 (c)，(d) を示す語例が記録されている。

④破擦音 k$\widehat{\text{kx}}^{w}$ が摩擦音化し，ff が生じる。破擦音の破裂の部分が弱まり，唇音化の要素によって歯唇摩擦音 ff が生じる。今回調査した話者は全員，(e) ff の状態で，摩擦音化が完了している。

4.2.2 kura 以外の変化

以下，[1] (あ) の kur 以外の変化について述べる。母音は kura 同様，CVCa を代表例として中心的に述べる。

(い) kuwa の場合は，①の変化がなく，(b) から始まるものである。ku'e, ku'o のように母音が直接連続する場合も，実質のわたり音 w が存在する場合と同様，②の ue > we，uo > wo の変化と子音の代償延長が起こり，③④を経て ffe, ffo が成立したと考えられる。(う) は①②の変化がなく，(c) から始まるが，「火事」一語であることから，(い) に合流したのであろう。(え) は，ɸura > ɸuwa > ɸɸ^{w}a > ffa の変化が推定される。(お) hu'e の場合も，わたり音 w があるものと同様の扱いが可能であろう。(か) は bura > buwa > bb^{w}a > bba の変化が推定される。(き) の変化の説明はやや困難を伴う。r はその前の母音 i に関連する接近音 j に変化したと仮定し，ɕira > ɕija > ɕɕ^{j}a > ssa[9] を推定しうる。ただし，最後の脱口蓋化の変化が不自然さを伴う。もう一つの案として，「シ」の子音に口蓋化がなく母音が中舌寄りのものを祖形に立て，r が軟口蓋接近音 ɰ へ変化したと仮定できるかもしれない。すなわち，sɨra > sɨɰa > ssɨ^{ɰ}a > ssa の変化である[10]。(く) は (き) の有声音のケースと推定できる。(け) ruwa > vva は，ru そのものの脱落による促音化の一種であろう (例えば，見ルカ > 見ッカ)。ただ，長音化されるはずの子音 w は接近音であるため，安定的に長音化しうる継続音 vv に変わったと見られる。

4.3 方言集の記録

安島方言の方言集である中空清三郎 (1964ab, 1991) には，当該の語彙で未だ破裂 k の要素を残した例が見られる。[6] にこれらの一部を引用する。原文は縦書きで，見出し語はひらがな表記である。原文の表記には「く，くわ，くふ，ふお」などに小さい文字が使用されることがあり，それらをカタカナで表記する。促音の「っ」はそのまま用いる。表記が年代で異なる場合，1964ab/1991 と表記する。参考に今回調査した現在の資料 [7] も加える。

[6] 方言集の記録 (中空清三郎 1964ab, 1991)

くろんね／くフオんね《田のしきりあぜ》，ふ

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

くらぎ／ふっくわん《鰤の幼魚》，まくわ／まクわ《枕》，うざくわしい／うざクワしい《いけすかない》，かぶクお《紙袋》，つばクフわ／つばクわ《燕》，ふっくえ／ふっクえ《ふくれんぼ》，ふっふお《袋》

[7] 今回の調査の記録

ffonne《田のしきりあぜ（クロウネからか）》，ɸuffaɴ《小型の鰤》，maffa《枕》，uzaffaçi《いけすかない（ウザクラシイから）》，ka(m)buffo《紙袋》，tsubaffo《燕》，ɸuffe《海ほうずき》，ɸuffo《袋》

中空（1964ab, 1991）の記録は，[5] であげた kur, kuw, kk^{w}, k$\widehat{\text{kx}}^{w}$ のそれぞれの過程を書き表したものを思わせる。これらの例から，[5] の③の破擦音化は，比較的近年起こった変化と推定される。また④の ff への摩擦音化はさらに新しい。ff に完全に移行した例はこの記録では「ふっふお《袋》」のみである。今回の調査でも明らかなように，変化④は現在の話者の世代で急速に広がったものと見てよい。中空氏が 1902 年生まれ，今回の話者が 1936 ～ 41 年生まれということから推定すると，この変化は 20 世紀初頭前後に発生し，20 世紀半ばには完了した変化と見られる[11]。

中空（1964ab, 1991）では，bb の例も見られる。見出し語の表記では，促音「っ」のほか，ひらがな「ぶ」の小さな文字を用いたものがある。以下では小さい文字「ぶ」をカタカナ「ブ」で表す。

[8] 方言集の記録（続き）

あブばん／あっばん《魚の名，あぶらめ》，あブばげ《油揚》，くちっば《唇》，こっば《ふくらはぎ》，つブべ《釣瓶》，べっば《熊手》，やブべる《破れる》

「っ」と「ブ」が異なる音価を表していたかどうかは不明であるが，「ブ」が唇音化した bb^{w} を表していた可能性もある。唇音化の有無にかかわらず，重子音 bb の発生は ff の摩擦音化よりも以前だったことが窺われる。なお，中空（1964ab, 1991）には ss を表した例は見られない。

4.4 「食う」と例外「くれる」の活用

ここでは音変化によって不規則な活用になった動詞の例「食う」と音変化から見ると例外的な形をとる「くれる（呉れる）」を取り上げる。

「食う」は，ku の後続音の性質によって，ku のままであったり，ff に変化したりして，語幹に交替形が生じた。一方，「くれる」の語幹クレは対応から，語幹 ffe が予想されるが，実際は kke で現れ，例外をなす（cf. offeru《遅れる》）。語幹 kke は破擦音でもないし，唇音化も見られない（× kk^{w}e, × k$\widehat{\text{kx}}^{w}$e）。[9] に「食う」と「くれる」の活用を示す。

[9]「食う」と「くれる」の活用

「食う」		「くれる」	
ku	《食う》	kkeru	《くれる》
kuta	《食った（< kuuta）》	kketa	《くれた》
kuitai	《食いたい》	–	
ffe	《食え（命令）》	kke	《くれ》
ffeija	《食えヤ（命令）》	kkeija	《くれヤ》
ffaɴ		kkeɴ	
《食わない（< kuwaɴ）》		《くれない（< kureɴ）》	
ffeja	《食えば》	kkerja	《くれれば》
ffosa	《食おうサ（勧誘）》	–	

「くれる」の例外は，この動詞が依頼表現の補助動詞（「～てくれ」）として頻繁に使用されてきたことに関係があると考える（荻野千砂子 2007）。すなわち，te kure は一旦 te kk^{w}e まで変化が進んだが，唇音化の要素 w が，前接する「て」te と後続の母音 e に挟まれる中で同化して消失したと考える。

[10] テクレの変化

te kure ＞ te kuwe ＞ te kk^{w}e ＞ te kke

唇音化要素が消失すれば，その後 ff に変化す

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

る可能性が失われる。このように成立した形式が本動詞「くれる」とその他の活用形にも及んだものと考えられる。

5. 安島方言の重子音と琉球語諸方言

5.1 琉球語宮古八重山方言

ここでは琉球語宮古八重山方言との類似性を取り上げる。宮古八重山方言の音韻に関しては，多くの記述研究があるが[12]，ここでは比較的早いものとして宮古島方言を扱った崎山理（1963）を引用する。崎山（1963）では，重子音の対応を宮古島方言独特の assimilation（同化）として，以下のようにまとめている。以下は宮古島平良方言の例であるが，これらの現象は宮古島方言全般に見られるものである。

[11] 宮古島平良方言（崎山理 1963, p. 17）

原型　　宮古方言の同化形

1. kurV (korV) (kuwV)　→ffV
2. sirV siwV; (dzirV) (tsirV)
   →ssV (ʃʃV); (ddʒV) (ttsV)
3. burV (urV)　→vvV
   （語末，語中では -β, -υ, -ɸ）

語例：

1. ffu《黒》，maffa《枕》，ffa《子（子等に当るか）》，ffaŋ《食べない》，ffu(o):《食べる（食らうに当るか）》，ffɳ《呉れる》[13]，ffɳ《閉じる，降る（繰るに当るか）》，ffi《閉じろ》，tsɨffɳ《作る》，numtaffa nja:ŋ《飲みたく（は）ない》
2. ssu《白》musṣu《蓆》，musṣɨ《毟る》，ṣsaŋ《知らない》，ṣsam《虱》，umuʃʃi《面白い》，aṣsu《為ろ》，kaṣsa《大型の葉（柏に当るか）》，ṣsaŋsɨ《秋（師走に当るか）[14]》，ɸuddʒa《鯨》，uttsusɨ《移る，写る》
3. avva《油》，kuvva《腓》，vvaŋ《売らない》，vva《お前（うらに当るか）》，uυdzim《春》，niβ《寝る》，kiυsɨ《煙》

伊良部島方言，大神島方言では，さらに進んだ同化現象があるが，ここでは福井県安島方言と関係するものだけに引用を留めることにする。

明らかに，[11] の 1 ～ 3 の例と安島方言の例は似ている。ただし，宮古島方言では [11] の「同化形」の V に相当する母音の性質が関係しない。また，3 の vv は安島方言では bb で現れる。

一方，八重山方言でも，類似の現象が見られる。加治工真市（1987）から「暗い」の例をあげる。[12] は唇歯摩擦音，両唇摩擦音が現れない与那国島，西表島をのぞく八重山各島の名と語形（アクセント記号は略）である。

[12] 八重山方言の《暗い》（加治工真市 1987, p. 99, p. 110）

石垣 ɸɸasa:ŋ　　波照間 ffahaŋ
竹富 ɸu̥ɸasa:ŋ　　鳩間 ffa:ŋ

八重山方言では，標準語 kur と対応するものは，ff の他に両唇摩擦音の ɸɸ（ɸu̥ɸ）も見られる。

5.2 宮古八重山方言の変化

宮古八重山方言で見られる，標準語 kur に対応して摩擦の重子音が現れる現象は，どのような変化を経て成立したかこれまでの諸説を述べる。

中本正智（1976）で述べられているように，ku > fu (ɸu) の変化は，南琉球を特徴づけるものとして，広範に見られる変化である（p. 123）。下地良男（1974）では，まず子音 ku > fu の摩擦音化のあと，u から ɨ への変化（u > ɨ）とその脱落を仮定する。さらにその脱落で生じた fr，sr，vr などの子音連結が重子音を生んだとしている（[13]）。

[13] 宮古島方言の ff, ss, vv の成立過程（下地良男 1974, p. 86）

kuro > furo > fɨru > fru > ffu　《黒》
makura > mafura > mafɨra > mafra > maffa　《枕》
siro > sɨru > sru > ssu　《白》
avura > avɨra > avra > avva　《油》

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

中間段階にある u > ɨ の変化については，沢木幹栄（1974）の批判があり，おそらくこの過程を想定しなくても重子音への変化は可能かと思われる。

先にあげた加治工（1987）では，先に ku > ɸu の変化が起こり，その後に r が狭母音の後に立って，しかも母音間に r がくると，融合変化を起こすとしている（p. 99）。すなわち，4.1 節の（1）であげた k の摩擦音化，r の消失（ここでは融合変化）がこの順で起きるわけである。

こうした考え方は，宮古島平良方言を扱った狩俣繁久（2005）でも見られ，*kur > ff の変化を，*ku > *fu > f̬ で生じた [f̬] の影響（進行同化）によって，-ru, -ra の [r] が摩擦音化したものとしている（p. 98）。

宮古八重山方言，安島方言双方とも，標準語 kur に ff (ɸɸ) が対応しているが，成立のプロセスは異なっていると見られる。主たる相違点は k の摩擦音化と r の変化の順序である。宮古八重山方言に関する諸氏の考えでは，k の摩擦音化が r の変化より先行し，他方，安島方言の仮説では，r の変化が k の摩擦音化に先行する。二つの音変化の順序が異なり，またそれらが生じる環境も異なるが，結果として双方方言とも同じ対応が得られたと考えられる。

5.3 北琉球方言の「枕」の語形

宮古八重山方言以外の北琉球方言では，［5］で推定した kura の音変化のうち，（c）の段階の kk^wa と似た音声実質を見いだすことができる（沖縄本島首里方言 makkwa 国立国語研究所編 1963，沖縄本島北部今帰仁方言 makk'a: 仲宗根政善 1983，伊江島方言 makk'a: 生塩睦子 1999 など）。さらに中本正智（1981）の「枕」の図（pp. 362–363），上野善道編（1989）「枕」の -kura の図（p. 24）では，琉球語全体を俯瞰することができる。それによれば，kk'wa(:) は徳之島，沖縄本島やその周辺の島など，kk'a(:) は喜界島，本島本部半島や伊江島などに分布している。

これらの資料から，北琉球方言の「枕」の成立は［14］のように考える。

［14］北琉球方言の「枕」の変化

makura > makuwa > makk'wa > makk'a

宮古八重山方言と異なり，ku の摩擦音化は起こらず，その代わりに，r の子音の変化・消失によって重子音を生じさせ，唇音化と喉頭化を伴う kk'wa が発生した。さらに，喉頭化重子音 kk'a も，［14］の kk'wa の段階から唇音化が消失したと容易に考えることができる。北琉球方言が安島方言と異なる点は，重子音 kk^wa が破擦音化および摩擦音化する方向に発展するのではなく，閉鎖を保持したまま喉頭化し，続いて唇音化要素を失う結果に発展した点である。

5.4 伊江島方言の喉頭化音 k'

さらに，安島方言の例は，伊江島方言における語頭の喉頭化音 k' の発生に関しても示唆を与える。［15］は，標準語 kur-, kor-, kow- に対して伊江島方言ではどんな語例が対応するか，生塩睦子（1999）から引用したものである。対応の記号 ‖ の左は対応に関わる標準語 CVC- の音連続，右は伊江島方言の語形である。

［15］標準語 kur-, kor-, kow- と伊江島方言の喉頭化音 k' の対応

kur- ‖ k'uɭ:sa《黒い》，k'eŋ《食べる（食らうに当るか）》，k'aŋ《食べない》，k'iɭ:juŋ《与える，あげる（くれるに当るか）》，k'iɭ:juŋ《暮れる》，k'uɭ:juŋ《閉める，閉じる（繰るに当るか）》，k'a:naɭ, k'aɭ:《労役用の鞍》，k'aɭ:sa《暗い》

cf. kub-, kum- ‖ k^hudiɭ《首》，k^humuɾ:《雲》，k^huɲuɾŋ《組む》，k^huɲuɭŋ《汲む》

kor-, kow- ‖ k'waɭ:《子（子らに当るか）》，k'o:ʃuɭŋ, k'o:raʃuɭŋ《壊す，崩す》

沖縄北部方言の今帰仁方言では，標準語のカ行のク，コが語頭に立つ場合，クの子音に対して喉頭化音（無気音）k' が，コの子音に対して非喉頭化音（有気音）k^h が現れるが（仲宗根政善 1983, p. 633），伊江島方言では，そうした対応関

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

係が明確ではない（[15] の cf. 伊江島方言 k^h で現れる「首，雲，組む，汲む」のクの子音は，今帰仁方言では規則的に k' で現れる）。

伊江島方言において，標準語 ku, ko の子音が喉頭化音（無気音）k' で現れる要件の一つとして，過去の r（あるいは w）の存在とその消失が関係している可能性がある。すなわち，喉頭化音 k' の一部は，子音 r の消失に伴い，前置する k が長音化（重子音化）したことに由来するという可能性である。それは［14］で示した北琉球方言の変化が，語頭でも起こり，さらに k' になった変化，kur (kor) > kk'w > kk' > k' を想定するもので[15]，r の消失と重子音の発生という前半の過程は安島方言の変化と共通する。

福井県安島方言の重子音の発生の事例は，以上のように，北琉球諸方言の重子音や喉頭化音の発生を考える際に，参考になりうることを示した。

6. まとめ

本稿では福井県安島方言に関して以下のことを明らかにした。

(1) 安島方言の重子音 ff, bb, ss と標準語の対応関係を示した。そこには対応する /ku, hu, bu, si/ の音節だけでなく，後続の r ないし w の存在と母音の広狭が関係していることを示した。

(2) この方言の重子音の成立に関して考察を行った。ff の重子音の場合，r の消失と母音縮約とそれに伴う代償延長，ならびに破擦音化があったと推定した。また，方言集の記述から，ff の重子音は 20 世紀前半に成立したことを示した。

(3) この方言の重子音と標準語の対応関係は，琉球語宮古島八重山方言と類似していることを指摘した。

(4) 最後に，この方言の変化の事例が，琉球語諸方言の音変化を考察する際に，新しい提案を導くものであることを指摘した。

謝　辞

安島調査でお世話になった皆様に感謝申し上げる。また，2 名の査読委員から大変有益なコメントをいただいた。特に宮古八重山方言に関しては，指摘に従い，初稿の誤りを正し改稿した。記して感謝申し上げる。本稿は第 87 回日本方言研究会（2008 年 11 月 1 日，岩手大学）で発表した内容が基礎となっている。発表時，ご意見を頂いた多くの方に感謝申し上げる。なお，本研究は，平成 22 年度科学研究費補助金，基盤研究（C）「福井県安島方言の調査研究」，課題番号 22520461 によってなされた。

〔注〕

1) 近隣の方言と異なる特徴として，存在のオル（三国の市街地を含む嶺北地方の多くはイル），アスペクト形式トル（他地域はテル），自称詞ンダ（他地域はウラ），間投詞メーなどがあげられる。

2) 管見では中空清三郎（1964ab, 1991）の語彙集があるだけである。中空氏は安島出身で 1902 年 9 月生まれ，元春江中学校長（1949–52）。

3) 話者は生え抜きの女性 4 人（1936 年生 2 人，1938 年生，1941 年生）で全員が漁業従事者（海女）である。この話者たちの音素目録は確定していないが，主な音声・音韻の特徴をあげれば，以下のとおりである。いわゆるズーズー弁とは認められない，「ク」は本土方言に一般的な [ku] で [u] は円唇母音，ガ行子音は語中では一般に [ŋ]，「セ，ゼ」の子音にわずかな口蓋化が認められる，いわゆる合拗音 [k^w], [g^w], [$ŋ^w$] はなく，「ヒ」は [çi]，「フ」は [ɸu] であり，CV 構造では単子音の [f] は現れず，重子音を伴わない [fa], [fe], [fo] の音節はない。

4) 輪島市久手川（ふてがわ）の地名の存在から，能登半島北西側（外浦）にもこの現象が分布していた可能性が高い。

5) 逆に ri, ru の子音が脱落することや，ri, ru 音節全体が脱落することはしばしば見られる（上野善道編 1989, pp. 73–74）。

6) wo の例は見いだせてないが，we に相当する例は中空清三郎（1964a）に「おいぅえ《炉の上座》」が見られる（p. 66）。

7) なお，「代償延長」というと，子音の消失に伴う母音の延長をいう場合が多いが，ここでこの用語を

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

使用しても誤解はないと思われる。

8) 安島方言では「沢庵」は taffaɴ に変化したが，「竹輪」は tɕikuwa のままである。「竹輪」は新しい語の可能性がある。

9) 安島同様，越前海岸に位置する福井市蒲生（旧越廼村蒲生）の方言を記した青木捨夫（1977）には，ハッシャ《柱》，ハッシャドケイ《柱時計》が見られる。ɕira > ɕija > ɕɕa のように直音化がない自然な変化を想定できる。なお，蒲生方言にも r 音の消失と重子音 kk, bb の発生が見られるが，ff は生じていない。例えば，ウザッカシイ《見苦しい》，ヤッベル《破れる》。

10) この祖形を認めることは，安島方言がかつてシ／スの区別がない方言だったと想定することにつながる。

11) 更に若い年齢層では，maffa > maɸɸa の変化が見られるが，世代別の実態については別稿に譲る。

12) 宮古島方言の maffa《枕》の例が最も早く見られるのはネフスキー（1926）。宮古島とその周辺の方言について，音韻を中心に扱った論文には，本文引用の崎山理（1963）の他，北村サムエル（1960），本永守靖（1972），下地良男（1974），柴田武（1981），かりまたしげひさ（1982），名嘉真三成（1983），沢木幹栄（2000），狩俣繁久（2005），Shimoji, M.（2007）などがあり，また，多良間方言には津波古敏子（1982），八重山方言には加治工真市（1987）などがある。いずれもこれらの記述には安島方言と類似の現象が見られる。

13) 本永守靖（1972, p. 19）では，ffaŋ《食べない》，ffu(o):《食べる（食らうに当るか）》，ffɳ《呉れる》は促音化していないという。

14) 師走ではなく，「シラニシ」（風の名）に由来か。ウェイン・ローレンス氏のご教示による。

15) 伊江島方言の個々の語形が，どのような過程で成立したのかを述べるには，克服すべき点が残されている。例えば，［15］であげた「黒い」の形容詞語幹 *kuro- > k'uɫ:-，「子（等）」*kora > k'waɫ: の変化の場合，想定した kur (kor) > kk'w > kk' > k' の各変化と o > u の高母音化との相対年代の問題，唇音化要素 w はどういう条件で残るのかという問題，発生した喉頭化子音に後続する母音の長さの問題（cf. k'uɫ:sa《黒い》と k'eŋ《食べる（食らうに当るか）》，k'aŋ《食べない》）が未解決である。ここでは kur-, kor-, kow- と k' の対応の指摘にとどめておきたい。

参考文献

青木捨夫（1977）『越廼村漁民方言語彙』（私家版）.

飯豊毅一（1988）「特殊方言音の地域差・年齢差」『方言研究法の探索』（国立国語研究所報告93）81–122，秀英出版.

井上史雄（2000）『東北方言の変遷』秋山書店.

上野善道編（1989）「日本方言　音韻総覧　付　方言音節引き索引」『日本方言大辞典　下巻』小学館.

荻野千砂子（2007）「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3 (3), 1–16.

生塩睦子（1999）『沖縄 伊江島方言辞典』伊江村教育委員会.

加治工真市（1987）「八重山方言の比較音韻論序説」『琉球方言論叢』（琉球方言研究クラブ30周年記念）93–117.

かりまたしげひさ（1982）「宮古島方言のフォネームについて」『琉球の言語と文化』（仲宗根政善先生古希記念）63–80.

狩俣繁久（2005）「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11, 67–113.

川本栄一郎（1970）「石川県珠洲市方言の［ク］と［フ］」『金沢大学語学文学研究』1, 98–110.

北村サムエル，H.（1960）「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41, 12–23.

国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』（国立国語研究所資料集5）大蔵省印刷局.

後藤利雄（1972）「音韻」『山形県方言概説』（山形県方言研究会）45–59.

崎山理（1963）「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』54, 6–21.

沢木幹栄（1974）「下地論文を読んで」『月刊言語』3 (10), 91.

沢木幹栄（2000）「宮古方言の問題点」『音声研究』4 (1), 36–41.

柴田武（1981）「沖縄平良方言の音韻体系」『方言学論叢　方言研究の推進』（藤原与一先生古希記念論集）三省堂，15–50.

下地良男（1974）「南島宮古方言の音韻変化について」『言語』3 (7), 81–90.

津波古敏子（1982）「多良間島塩川の方言における音韻の考察」『琉球の言語と文化』（仲宗根政善先生古希記念）33–61.

仲宗根政善（1983）『沖縄　今帰仁方言辞典』角川書店.

中空清三郎（1964a）「安島方言（一）」『若越郷土研究』9 (5), 65–75.

中空清三郎（1964b）「安島方言（二）」『若越郷土研究』9 (6), 92–99.

中空清三郎（1991）『安島の方言と解説』住みたくなる町3600安島協議会印刷製本.

名嘉真三成（1983）「琉球宮古長浜方言の音韻」『琉大国語』2, 3–23.

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局.
中本正智（1981）『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社.
ネフスキー，N.（1926）「アヤゴの研究」『民族』1 (3)（N. ネフスキー，岡正雄編『月と不死』東洋文庫 185, 43–60，平凡社に再録）.
本永守靖（1972）「平良方言の音韻法則」『琉球大学教育学部紀要』16 (1), 15–21.
Shimoji, Michinori (2007) "Irabu Phonology."『思言』（東京外国語大学記述言語学論集）3, 35–83.

(Received Jan. 5, 2011, Accepted Apr. 5, 2011)

資料：安島方言重子音対応例

この資料の並び方は以下のとおり。左：**標準語あるいは対応語の形**（音韻表記）‖ 右：**安島方言の形**（簡略音声表記），語例は安島方言，＜は由来する語，＝は標準語と同じ形

kura ‖ **ffa** ffa 蔵，iffa いくら（値段），maffa 枕，meffa 盲，saffa 桜，saffa no ki 桜の木，saffandama サクランボ，udzaffaçi 不快，うるさい（＜ウザクラシイ），ɸuffaɴ 小型の鰤（＜フクラギ），cf.＝kura 鞍，＝kurai 位，暗い

kuro ‖ **ffo** ffo 黒，ffoŋoma 黒ごま，ffozato 黒砂糖，ffokoŋe 黒こげ，ffome 黒眼，ffoi 黒い，ffonatta 黒くなった，maffoffonatta 真っ黒くなった，ffonne くろ（田畑の畔．＜クロウネか）ɸuffo 袋，ka(m)buffo 紙袋，tebuffo 手袋，tobuffo 戸袋，ɸuffo, hoffo ほくろ，ɸuffoku 梟（＜フクロク），tsubaffo 燕（＜ツバクロ），cf.＝kuronatta 暗くなった

kure ‖ **ffe** ffe 暮れ，çinoffe 日の暮れ（「年の～」は不使），cf. kkeru くれる，kafferu 隠れる，kaffembo かくれんぼ，ɸuffe 海ほうずき（＜フクレ）

kuru ‖（標準語と同じ）＝kuru 来る，＝mekuru めくる

kuri ‖（標準語と同じ）＝kuri 栗，庫裏

kuwa ‖ **ffa** ffa 桑，鍬，ffa no mi 桑の実，ffaeru 銜える，ffaçi 詳しい，iffa 行くワ

ku'a ‖ **ffa** taffaɴ たくあん

ku'o ‖ **ffo** ffo 食お（勧誘）

ku'e ‖ **ffe** ffe 食え

kwa ‖ **ffa** ffaʑi 火事（古形。＜クヮジ。他の合拗音 kwa, gwa, ŋwa の例なし）

hura ‖（ffa の語例なし。標準語と同じ）＝ɸaraɴ 降らない，＝boːɸura ボーフラ

huro ‖ **ffo** ffo 戸棚（＜風炉），ffo 風呂（ju が普通だが ffo とも）

hure ‖ **ffe** afferu あふれる（主に子供が暴れる意味で）

hu'e ‖ **ffe** fferu 増える

huru ‖（標準語と同じ）＝ɸuru 降る，振る，＝ɸurui 古い

huri ‖（標準語と同じ）＝ɸuri（人の）ふり

bura ‖ **bba** abba 油，abbaŋe 油揚げ，abbaɴ あいなめ（魚。＜アブラメ），kabba 蕪菁（＜カブラ）kobba 脛（＜コブラ），nabbaɴ 触らない（＜ナブラン），bebba 熊手（＜ベブラ）

buro ‖（bbo の語例なし。標準語と同じ）＝naŋaburo 長風呂（希），＝kaburo 被ろう

bure ‖ **bbe** abberu 日焼けする，魚が焼ける，暇になる（＜アブレル），jabberu 破れる，kabberu かぶれる，tsubbe 釣瓶（＜ツブレ）

buri ‖（標準語と同じ）＝buri 鰤，＝hoːkaburi 頬被り

sira ‖ **ssa** ssaɴ, ssami 虱，ssaɴ 知らない，ssananda 知らなかった（＜シラナンダ），ssako 白子，ssaberu 調べる，hassa 柱，kassa かしら（長。amaŋassa 海女～）

siro ‖ **sso** sso 白，ssoi 白い，ssoŋoma 白ごま，ssozato 白砂糖，ssome 白眼，ssoto 素人，massosso 真っ白（＜マシロシロ），messo 蓆，usso 後ろ

ziro ‖ **ddzo** iroddzo 色白

ruwa ‖ **vva** ovva 居るワ，kuvva 来るワ，çivva するワ，kuŋuvva 潜る（＜クグル）ワ

NII-Electronic Library Service